

information catch

HASEさんの「悟り」入門

【最終回】

昔は人が亡くなると、お寺が葬儀の世話をしていたそうだが、今では葬儀社が全てを取り仕切るのが当たり前になっている。そんな状況も手伝って、お寺の存在を遠く感じる人は増えているようだ。地域とお寺との関係に危機感を募らせる人は少なくない。長谷川俊道ご住職も、もちろんそのひとり。今、お寺にできることはなんだろう。ご住職は「こんな時代だからこそ、お寺の存在意義がある」と考える。

より良く生きるために、お寺にできることは？

皆さん、こんにちは。瑞岩寺住職の長谷川俊道（通称HASE）と申します。このコラムも今回で最終回。お読みくださった皆さん、ありがとうございます。

連載の締めくくりは、「お寺」の役割について考えてみたいと思います。

初回のコラムでも書きましたが、昔のお寺は、地域の人誰でも気軽に立ち寄れるような場所でした。家庭の悩み、ご近所づきあい、人生の迷い、あるいは日常のほんの些細なことでも、「ご住職に話してみるか」とお寺においでになり、あれこれ話をしてくださいような場所だったのです。

それが、今はどうでしょう。世の中が便利になるほど人と人との関係は希

薄になり、お寺から足が遠のく方も多くなりました。これを読まれている皆さんも、お寺を訪ねるのは、お盆やお彼岸のお墓参りのほか、観光目的で立ち寄る寺院を加えても年に数回という方がほとんどでしょう。

お寺といえば、お葬式のときにお経をあけてもらう、戒名を授けてもらう存在、めったにかかわることのない場所だと思われてしまうのは、とても残念でなりません。もちろん故人をお送りするのも大切な役目ですが、果たすべき役目はそれだけではないはずで、たとえ時代が変わろうともお寺にできることはもっとあると思うのです。

もちろん、寺院関係者の中にも、「このままではいけない」と、独自で、あるいはグループで、お寺の未来を切り拓いていこうとする動きが広がっています。私自身も、書籍やフェイスブックで情報を発信したり、いろいろな方をお招きして本堂でセミナーや講演会、ライブ演奏を行ったりするなど、試行錯誤しながら皆さんとの接点づくりを考えています。

この秋のお彼岸には、津軽三味線奏者の吉田兄弟さんにお寺の本堂でライブを行っていただきました。ポランテ

ィアの皆さんによって灯された3000本のろうそくがステージを照らし、手を伸ばせば届くほどの距離でご兄弟の魂のこもった演奏を聴き、参加した全ての方が元氣と感動をいただいたと思います。お寺という場所で皆さんの心が一つになるという、とても素晴らしい一夜になりました。

残念なことですが、日本の「無縁社会」化はさらに進んでいくと思います。相次ぐ自然災害に地域社会のつながり、人の絆の大切さが見直されてきてはいますが、「じゃあ、今日からそうしよう」と変えられるほど、人間は器用ではないでしょう。だからこそ、お寺のような場所が、地域の方を結びつけるコミュニティサロンになればいいと思うのです。そして、お寺で触れる仏様の教えが皆さんの心の拠り所となれたら、とてもうれしいですね。

このコラムで取り上げてきた「四法印（諸行無常・諸法無我・一切皆苦・涅槃寂靜）」も、どれも特別なことではありません。自分のことばかりに執着をせず、他者への感謝とおもいやりを大切に、そして、気づきと学びによって成長を続ける。こうした毎日の取り組みの先に、私たちの幸せ、心の



群馬・瑞岩寺住職 長谷川 俊道
福井県永平寺で修行後、ハワイ・パールハーバーのお寺に赴任。帰国後は瑞岩寺副住職となり、4月に住職に就任。開かれたお寺を目指し、財務公開や、お寺での講演会、ライブ開催など、お寺の常識を覆す挑戦を続けている。現在、「HASEの金曜は聴きこみ寺」というポッドキャスト番組により良く生きるヒントを発信している。

豊かさはあるのではないのでしょうか。何かに悩んだとき、迷ったときには、このことをぜひ思い出していただきたいと思います。

そして、一人で抱えていたくないときは「住職に話してみるか」と、お寺に足を運んでみてはいかがでしょうか。まだまだ全てのお寺が、受け入れてくれる状況ではないかもしれませんが、ですが、私と同じような志のお寺は確実に増えています。もちろん群馬県太田市の瑞岩寺でよろしければ、私はいつでもお待ちしております。

